

第二十七回

中村邦生の会

芭芭拉

中村邦生

柑子

野村万蔵

令和四年十一月三日午後二時始 (開場午後一時)

十四世喜多六平太記念能楽堂

番組

おはなし

関 幸彦 (日本大学教授)

狂言

柑子

野村万蔵

野村万之丞

休憩二十分

能

中村邦生

芭蕉

宝生欣哉

野村万蔵

曾 國川
和 正 博 純
松 田 弘 之

内田安信
狩野了一

佐藤寛泰
内田成信
友枝雄人
金子敬一郎
大村靖嗣
香川昭世
友枝昭世
長島茂

終了予定時刻 五時頃

次回予告

「遊行柳」中村邦生

令和五年十一月四日(土)
セルリアンタワー能楽堂

芭蕉 (ばしょう)

「草木悉皆成仏」の世界観を芭蕉の精に仮託させ、悟りの心情を語った内容となっている。舞台は中国、楚国の小水(湖南省)、時節は秋。日夜経文を読誦する僧のもとに里女が訪れ、經典の功德による仏縁を乞う。女人は草木成仏の謂れを僧に尋ねる。僧が法華經の葉草喩品の功德を「草木国土有情非情も皆これ諸法実相」と説くと、これに得心した女人は、自らを芭蕉の精と仄めかし消える。(中入)後半は芭蕉精と言葉を交わした奇徳を想いつつ読経を続ける僧の前に、再び芭蕉の精が現れる。月光冴える庭中で、仏法の功德についての問答が再び語り伝えられる流れとなる。法華經の万物成仏の理を讃えつつ、風破による芭蕉葉の脆さと、身のはかなさを春夏秋冬の移ろいととも語る趣向となっている。露霜の葉袖を翻し舞う芭蕉の精の姿に、幽玄の世界が象徴されているようだ。烈しく吹きすさぶ秋風に、花も千草も散じ去り、破れた芭蕉残映だけが残される。

特別のストーリー性があるわけではないが、静の世界を底流に見据え、動が同居する詞章と仕舞には、芸術性の高みが伝えられており、それを演者がどう表現するかもこの作品の見所といえよう。非情の草木を芭蕉に象徴化させつつ、仏縁による悟りの諸相に想いを馳せ、余韻に浸りたい。ちなみに俳聖。松尾芭蕉は己の生を”無用ノ用”と喝破した。芭蕉の号も、本謡曲が語るように、万物に宿された、生あるものへの畏敬を込めたところに由来した発案だったのだろうか。

柑子 (こうじ)

主人からの預物の柑子(ミカン)を食べた太郎冠者の言い訳が、笑いのツボである。主人は接待で出された三つなりの柑子を太郎冠者に持ち帰らせるが、それを食べたことの言い訳がおもしろい。一つは地面に落として汚れたため、二つ目は懐に入れつづれたためだと言い張る。残る三つ目はといえば、一つのみ残っているのでは、かつて鬼界島に取り残された俊寛のようで気の毒との気持ちになり、これも自身の腹におさめたと語り、主人を呆れさせる。腹と六波羅を掛け詞で語る、そんな太郎冠者の機知のやり取りが圧巻だ。『平家物語』での俊寛僧都の悲劇性を取り入れ、巧みに弁解に転換させるあたりに、室町精神の成熟度を垣い間見することもできる。太郎冠者に代表される庶民の生き抜く知恵と力強さも、時代の産物といえそう。

(関 幸彦)



〒141-0021 東京都品川区上大崎4-6-9

*JR線・東急目黒線・都営三田線・東京メトロ南北線ともに目黒駅下車、徒歩7分

チケット料金

全 自由席

(座席指定可/指定料¥1,000)

一般券	正面・脇正面	¥6,000
	中正面	¥5,000
	二階席	¥3,000
学生席(二階席)		¥2,000

チケット販売開始は、9月20日頃の予定

*なお、会場での撮影・録画・録音は、堅くお断りします。又、携帯電話等、音の出る物もご遠慮お願いいたします。

☆お問合せ

・中村邦生の会 TEL 03-5310-5690
・喜多六平太記念能楽堂 TEL 03-3491-8813